

中学校社会科における思考力・判断力・表現力等の育成をめざして —言語活動を充実させるための単元・単位時間の構造化—

中島 一郎

中学校社会科で思考力・判断力・表現力等を育むためには、課題解決型の学習形態を取り入れ、その中で「解釈」「説明」「論述」という言語活動を充実させていくことが必要であると考えた。そこで本研究では、学習活動を構造化することで課題解決の四つのプロセスを明らかにし、各プロセスで行うべき言語活動を位置付けた。そして生徒が学習活動を進める際にヒントとなる、三種類のアシストカードを開発した。更に、グループでの学び合い学習を取り入れることにより、多様な考え方を身に付け、主体的に学習に取り組む生徒の育成をめざした。

第1章 思考力・判断力・表現力等を育む社会科

第1節 中学校社会科教育の現状

平成23年度実施の学習確認プログラム社会科の分析結果から、本市中学生の「思考・判断や技能・表現を問う問題の正答率が低く、読み取った情報や自分の考えを短い文章でまとめる問題での無解答率が高い」という実態が明らかになった。

このことから、本市中学生について育てたい力は、現学習指導要領で育成が求められている「基礎的・基本的な知識・技能の習得を基盤とする思考力・判断力・表現力等」であることがわかった。

第2節 思考力・判断力・表現力等を育む学習活動

中学校社会科における思考力・判断力・表現力等の力を、社会的事象から見出した課題を解決するために働く力としてとらえた。そしてこれらの力は課題解決型の学習活動を通じて育まれるものと考え、次の二つを重点として示した。

- 「仮説立案→検証」の過程に社会的事象の意義や特色、相互の関連を、多様な視点から自分なりに考えて絞り込み、表現する場面を設けること
- 知識を概念化する過程を課題解決型の学習活動に組み入れ、「課題設定→仮説立案→検証→概念化」の流れとすること

第3節 中学校社会科における言語活動

課題解決型の学習活動の基盤となるのが言語能力である。そこで中学校社会科における言語活動を「解釈」「説明」「論述」ととらえ、これらを充実させる指導のポイントを、三つの鍵として次のように示した。

＜第一の鍵：言語活動の位置付け＞

言語活動の役割と内容を考え、1単位時間の学習活動の中で、計画的に配置する。

＜第二の鍵：つまずきの予想＞

言語活動を行う際の生徒のつまずきを予想し、具体的・視覚的に支援する方策を考える。

＜第三の鍵：グループでの学習活動の設定＞

他者の考えを理解したり、自分の考えをまとめたりしながら、意見交流する活動を取り入れる。

第2章 「みえる社会科」

第1節 単元・単位時間の構造化

各単元や各単位時間内の学習活動の役割と相互の関係を図に表し「構造化」することにより、指導の流れや言語活動の位置付け、習得すべき知識をひとめで把握できるようにした。

各単位時間内の学習活動は、「課題設定」「仮説立案と検証」「交流と再構築」「一般化と発展」の四つのプロセスの順番で構造化を図った。

第2節 アシストカードの活用

学習を支援するためのツールとして、次に示す3種類の「アシストカード」を開発した。

- ①課題解決の四つのプロセスを理解するための「学習の流れがみえるアシストカード」
- ②資料を読み取り、それに基づいて自分の考えを文章にまとめる際に支援となる「課題解決の方法がみえるアシストカード」
- ③思考の過程を明確にしたノート作りを支援する「思考の過程がみえるアシストカード」

第3節 学び合い学習の推進

グループでの意見交流による「学び合い学習」を課題解決の過程に取り入れ、基本的なルールを示した。生徒が自分の考えを正確に伝える工夫をしたり、他者の意見を批判的にみたり共感的に評価したりする中で、多様な視点に気付き、思考力・判断力・表現力等を育むことができると考える。

第3章 地理的分野の実践授業から

第1節 「ヨーロッパ州」の実践授業

この実践では、単元構造図を用いて、第3時までに習得した知識と技能を活用して第4時に探究活動を行うことを生徒に示した。また各単位時間の構造図を作成し、課題解決の四つのプロセスと各プロセスにおける言語活動を意識して取り組めるようにした。生徒は「解釈」の活動で「資料読み取りのアシストカード」を活用し、教科書や地図帳などの資料から必要な情報を読み取り、ノートの気付きメモ欄にキーワードとして記述した。そして「論述」の活動で「考えをまとめるアシストカード」を活用し、気付きメモ欄に挙げたキーワードを用いて自分の考えを文章にまとめた。「学び合い学習」では、資料から読み取った情報を基に、根拠を示して自分の意見を「説明」する姿が見られた。また他の生徒の意見を聞いて、より詳しい説明を求めたり、その意見を参考に自分の考えを見直したりする姿も見られた。「思考の過程がみえるアシストカード」を用いて作成した生徒のノートからは、課題解決の四つのプロセスを意識して考えを記録している様子が見て取れた。

第2節 「世界のさまざまな地域の調査」の実践授業

この実践では、単元構造図を用いて、今まで1単位時間で行ってきた四つのプロセスの中のプロセス1から3を、4時間かけて扱うことを生徒に示した。そのため各単位時間のプロセスを次のように変更して、単位時間構造図を作成した。

プロセス1:各単位時間におけるねらいや基本情報などの重要事項の確認
プロセス2:各単位時間の中心課題の取組
プロセス3:グループ及び全体での交流
プロセス4:次の学習につながる課題

この単元では、第2時の資料を集めて分析する「解釈」の活動が、その後のレポート作成や発表を支える重要なポイントだと考え、学校図書館を活動場所とした。また、十分な資料を準備するため、校区の小学校及び公立図書館から30~40冊の書籍を借りて活用した。

生徒は、今までの実践を通して習得した知識と技能を活用して、学習活動に取り組んだ。調べる国を決めて課題を設定する過程では、選択した国の基本情報を気付きメモ欄に書き挙げ、その情報を基に適切な課題を設定することができた。資料を収集し分析する過程では、設定した課題に対する仮説を立て、それを検証するための資料を選び

出して、必要な情報をキーワードやキーセンテンスとして書き出すことができた。レポートを作成する過程では、書き出した重要な情報に基づいて、自分の考えを自分なりの文章にまとめた。

第3時までの「学び合い学習」では、学習活動を進めてきて困ったことや不安なことを、交流を通じて解消できた。第4時の発表では、生徒同士が具体的な視点から相互評価を行うことで、より多様な考えに気付くことができた。明確な根拠を示して説明する姿からは、思考の深まりや判断力・表現力の高まりを見取ることができた。また、他の生徒の意見を聞いて自分の考えに生かそうとする姿は、コミュニケーション能力の高まりと学習に対する意欲の現れであると考えられる。

第4章 主体的に学習に取り組む生徒の育成をめざして

第1節 研究の成果と課題

「構造化」した授業を継続して行うことで、生徒は課題解決のプロセスを理解し、各プロセスに位置付けた言語活動を意識して取り組めるようになった。このことは、「自分から課題を決めて、解決できるようになった。」「読み取りができるようになった。」などの振り返りや、ノートに書かれた論述内容の充実から読み取ることができた。これらの変容は、「アシストカード」と「学び合い学習」の効果でもあると考えられる。「自分で~できるようになった。」という記述からは、アシストカードが学習の自立をうながす上で効果的であったことを見取ることができる。論述に見られる生徒の考えの広がりや深まりは、「学び合い学習」の前後において特に顕著であった。

今後は、各プロセスの適切な時間配分を考慮することや、生徒の実態に合わせたアシストカードの内容の改善、学び合い学習で更に考えを広げ深める工夫を考慮することが課題となる。

第2節 「覚える社会科」から「考える社会科」へ

今後、指導者は「考える社会科」をめざし、「『課題設定』の場面で基本情報の確認を」「『仮説立案と検証』を充実させるために学校図書館や公立図書館の活用を」「『交流と再構築』のためにキーワードをつなぎ合わせる論述を」「『一般化と発展』を図るために小学校での学習内容・指導内容の把握を」という視点で授業改善に取り組むことが重要である。更に他教科等と指導を連携し取組を進めることが、「生きる力」を育み、自ら課題を解決できる生徒を育成することにつながると考える。